マグロと生きる

高知県でゆいいつ、マグロの養殖に取り組んでいるのが、大月町です。

養殖の歴史を調べてみると、一人の男性が出てきます。

浜野 高彦さんは、１９８５（昭和６０）年に、柏島で、初めてマグロの養殖に取り組みました。そのころは、全国でも、大学の研究以外では、マグロの養殖を行っているところは、ほとんどありませんでした。

浜野さんは、マグロ漁師として働いたあと、三十代で、ハマチやシマアジなどの養殖を行いました。ハマチや、シマアジは、高い値段で出荷でき、たくさんの漁師が養殖をしていました。

そんなとき、浜野さんは、だれもやっていない、マグロの養殖に挑戦しました。

最初は、約千匹の稚魚を仕入れることにしました。

直径三〇メートルのいけすを、２き、かまえました。稚魚は、漁師に釣ってきてもらうようにしました。仕入れにも、細心の注意をはらいました。魚に手でふれると、さかなが傷むので、手でさわらないようにたのみました。

マグロをおどろかせないように、いけすに、人影がうつらないようにもしました。マグロがおどろいてこんらんすれば、網に衝突して死んでしまうからです。

こうして、大切に、マグロを育てました。

養殖は、順調には進みませんでした。

最初の年は、仕入れた約千匹のうち、出荷できたのは、わずか、約百五十匹でした。

「海に金をすてるようなもんじゃ。」

と、いわれることもありました。

それでも、浜野さんは、挑戦をやめませんでした。

いけすの網がよごれた時の、網のかえかたや、えさにまぜる栄養剤の量など、いろいろな工夫を続けていきました。

そして、二年目、約六千匹の養殖に成功しました。

東京の市場で、一キロあたり８５００円の値段がつくほど、おいしいマグロを育てることができました。

浜野さんはその後、一緒に養殖に取り組んでいた会社に、マグロの養殖をまかせることにしました。

今、マグロの養殖は、全国各地で行われるようになりました。

後年、取材に来た新聞社の方に、浜野さんが言った言葉があります。

「柏島の海やからこそ、養殖ができた。マグロ養殖の元祖は柏島ながです。」

高知新聞掲載記事参考